

## 折々の記 No141 : 緊密な三者連携に感謝!

(H21/6/1 脱稿)

去る 25 日夜、同居中の義母が薬石効なく幽明境を異にしてしまった。享年 85 歳であった。本年 1 月中旬に突発性多発性胃潰瘍にて吐血・下血して救急病院に搬送、一旦退院はしたものの、体調は勝れず、悪性リンパ腫も発見され国立病院に入院、家族としても爾後の療養等について覚悟を決めざるを得ない状況に追い込まれた。

それでも、再度の入院から退院した後は、救急病院搬送前、週に二回ほど喜んで通っていたデイ・ケアに通う気力も体力もあるやに見えたので、回数を減らして通所して貰った。

然しながら、もともと重い心臓手術もしておりリンパ腫の影響もあったのか、次第にデイ・ケアに通う体力もなくなってきた。本人の看護・看病を可能な限りしたいという家内のたつての希望もあり、入院治療の痛々しさを回避したいとの思いもあり、自宅で療養することとなった。

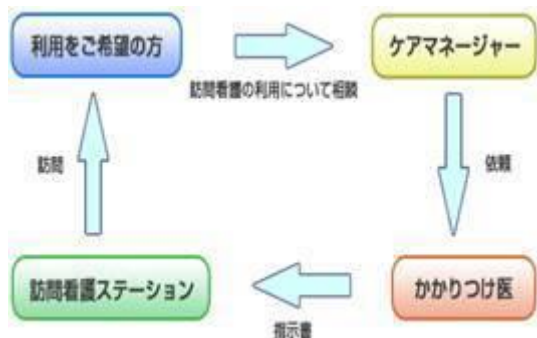
在宅での療養看護は家族のみでは不可能であり、何とか良い方策はないかと模索していたところ、介護認定を受けた時以来、親身に世話して頂いているケア・マネージャーさんの紹介で、掛かり付けの病院に併設されている訪問看護ステーションにお世話になることにした。

お陰様で、家内の献身的な看病と掛かり付けの病院の医師と訪問看護ステーションの看護師及び医師そしてケア・マネさん等の見事なまでの緊密な連携により、納得のいく在宅療養ができ、母も己が生命力の限界まで頑張り、家内を始めとする近親者も心静かに母を見送ることが出来た。

葬儀一切も終了し一段落したので、この間の所懐の一端を記したい。

### 1 在宅でのターミナルケアを可能とする体制

義母の場合には、先に述べたように、掛かり付けの病院の医師と、当該病院に併設されている訪問看護ステーション（看護師の隔日の訪問と緩和医療を専門とする医師による毎週の訪問診療の体制、随時の電話相談等）とケア・マネさんが本当に一体となって、しっかりと情報も共有し的確な指示をして頂いた。



このようなサポート体制があったからこそ、母の療養を一手に引き受けてくれる家内も安心して介護・看護が出来たものと思う。

このようなシステムのあることを知らなかったら、とても満足な介護・看病も出来なかったろう。本当に感謝である。

(社)日本訪問看護事業協会 HP から転載

### 2 家族に対するバックアップ

本人が痛みを訴えたり、或いは譫妄（せんもう）行動と言う回りの者には理解し難い特異行動を行う時の対応や、或いは四六時中目を離せないような状況など、素人ではどう対応すれば良いのか全く解らない時でも、電話すればどのように対応した方が良いでしょうと言うアドバイスを随時受けられる。しかも24時間応諾して頂ける。状況によっては駆けつけても呉れる。

隔日訪問して貰える看護師や週一回の医師の訪問診療の際には、経験豊富な彼等から家族へのアドバイスがあり、非常に心強い。

このような介護者・看護者に対するバックアップがなければ、在宅ケアは“言うは易く、行方は難し”であろう。愛情があれば如何なる困難をも乗り越えられる等と言うのは夢想である。現実筆舌に尽くせぬほど厳しいものであろう。

### 3 在宅での緩和医療:あるべき死か！

母の生前の希望もあり、家族の了承もあり、入院して治癒や延命のみを目的とした治療は望まなかった。確かに色々な管を体中に張り巡らされた状況は、痛々しくて家族としては見るに絶えないものである。その点、在宅により、モルヒネ等の投与やその他の緩和医療により、家族との心の交流をも維持しつつ、家族としても命の許す限りの面倒を見ることが出来る。

この在宅で緩和医療を行う期間と言うのは、家族にとっては、死という厳粛なものを自然に受け入れていく助走期間でもあるようだ。看護師により洗髪も体の清浄をも、時には下の世話までもして頂きながら、人間としての尊厳を一応保ちつつ、畳の上で旅立てると言うのは、不謹慎ではあるが、ある意味幸せなのかもしれない。

### 4 女性は遅しく、男はだらしない

それほど長い介護・療養看護の期間ではなかったが、それでもこの間己が如何に意気地なしなのかを痛感させられた。いざとなると何も出来ないのだから始末が悪い。家内や娘がいるとつい任せっきりにしてしまう。その点、女性は娘や孫だからというだけではない、何か言うか、いざと言う場合には如何なることをも辞さずに黙々と敢然として行うのだから強い。訪問看護する看護師の献身的看護にも敬意と感謝を捧げたい。

### 5 次代に繋ぐべきもの

母の死に際して、中学生になったばかりや小学生の多感な孫娘達は何を感じたのであろうか。病になり、入院や退院の都度その状況を己の目で確認しつつ、緩和医療の何たるかも解らぬ状況でも、次第に消えゆく命の炎を見つめつつ、彼女等は何を感じたのだろうか。家族愛や人間の死というものを感じてくれたのであろう。

また、2歳になったばかりの嫡孫は、「おばあちゃん、寝てるねー」と、お棺に横たわる母を見て無邪気に言う。それがまた参会者の涙を誘う。

3年前の父に引き続き、今回も自宅において近親者のみの所謂家族葬として、通夜から告別式を執り行った。九州から数年前に上京してそれほど知人等も多くないことから、このような形式とした次第だが、近親者のみによる心の籠もった葬儀が出来たと自負し

ている。

このような事を通じ子供や孫達に何かしらを伝えることが出来たものであろう。

#### 6 訪問看護システムの周知を！

今回、母の件がなく、ケア・マネさんが居なかったら、述べたような介護・療養は知ることなかったろうし、母にしろ家族にしろ、悲しいながらも意味満足のいく見送りは出来なかったと確信する。まだまだこのような訪問看護システムが知られていないことは残念である。周知努力が望まれよう。

#### 7 終わりに

己の死に様を如何にするかは重要時である。如何に生きるべきかは如何に死ぬべきかでもある。己の意思を子供や家内に残し伝えておくべきであろう。